

# 放射性ヨード内用療法を受ける患者の入院生活の実態とニーズの把握

キーワード：放射性ヨード内用療法・入院環境・隔離

2病棟4階

利重典子 磯部美紀 田中篤子 林下優子 下川悠紀 福永智子 仁志昌子

## I. はじめに

甲状腺癌に対する放射性ヨード内用療法（以下、RI治療）は、甲状腺がヨードを取り込む性質を利用し、放射性ヨードを服用して目的とする病巣に放射線を照射する治療である。放射性ヨード服用後は患者から少量の放射線が放出されるため、放射線量が基準値以下に達するまで、管理区域内にある放射線治療病室（以下、RI病室）へ入院を必要とする。入院中は他者への放射線被曝を避けるため、患者は外部との関わりを制限される。そのため看護師は病室の出入りを必要最小限とし、会話はナースコールを通じて行っている。

佐川らは「隔離され医療者や家族を含めた他者との関わりを制限されるという RI 病棟での生活は、心理的にも身体的にも苦痛を伴う」<sup>1)</sup>と述べている。このような状況において、患者の心理面も含めた状態把握や、患者が必要とする関わりが十分に行えているのか疑問であった。入院中の患者がどのような思いを持っているのかを知り、現状の看護を振り返ることが、より質の高い看護の提供に繋がるのではないかと考えた。

そこで、RI治療を受けた患者に対して、患者がどのような思いで入院生活を送っていたかをアンケート調査した。その結果から患者のニーズについて考察したので報告する。

## II. 目的

RI治療を受ける患者の隔離状況下における入院生活の実態やニーズを明らかにする。

## III. 研究方法

1. 期間：平成25年10月～12月
2. 対象者：過去3年間に甲状腺癌でA病院RI病室に入院した成人患者35名
3. 方法：研究者が独自に作成したアンケート用紙を用いて、患者が入院生活をどのように過ごしていたか、入院中に感じたことに関する質問内容で、「病室環境」「入院生活」「看護師の関わり」の3つのカテゴリーに分け、アンケート調査を行った。それぞれ項目を3段階で評価する選択式と、記述式で回答する質問を設定した。
4. 分析方法：アンケートの結果をカテゴリー別・項目別に分類して単純集計し、その結果を考察した。
5. 倫理的配慮：A病院医薬品等治験・臨床研究等審査委員会で承認を得た。

## IV. 結果

アンケート回答数は20名（回答率57.1%）であった。

対象の背景は、性別は男性7名（35.0%）、女性12名（60.0%）、無回答1名（5.0%）であった。年齢は40歳代1名（5.0%）、50歳代1名（5.0%）、60歳代11名（55.0%）、70歳代6名（30.0%）、80歳代1名（5.0%）であった。RI入院回数は1回14名（70.0%）

2回3名(15.0%)、3回1名(5.0%)、8回1名(5.0%)、無回答1名(5.0%)であった。

### 1. 病室環境について

項目別の集計結果は図1に示す通りである。広さについて、良い理由は「圧迫感、閉じこめられた感はなかった」「予想より広かった」であった。清潔さについて、良い理由は「不要な物がない」であった。病室外からの音について、良い理由は「少しは聞こえる方が寂しくなくて良い」悪い理由は「うるさかった」であった。色調について、悪い理由は「部屋全体が真っ白く早く出たいと思った」「他の色もあった方が良い」であった。臭気について、悪い理由は「食べ物の臭いがこもって鼻についた」「むかむかして食事の残りを整理する時が辛かった」「独特の臭いがする」であった。

病室に備えて欲しいものは、音響用品(30.0%)が最も多く、次いで冷蔵庫(25.0%)であった。病室に持ち込めたら良いものは、携帯電話(40.0%)が最も多かった。

### 2. 入院生活について

項目別の集計結果は図2に示す通りである。食事スペースについて、悪い理由は「狭い窮屈」「トイレの前で食事することを不快に感じた」であった。清潔活動について、良い理由は「短期だから気にならない」「清掃程度だったがそれ以上は仕方がないと思う」であった。娯楽・余暇活動について、良い理由は「テレビが自由に見られて良かった」悪い理由は「むかむかして元気が出なかった」「体がだるくて一日中横になって過ごしていたので何もしていない」であった。睡眠状況について、良い理由は「他人の鼾がなく快適だった」悪い理由は「空調の音がうるさく眠れなかった」であった。

「気分転換や気晴らしになったものはありましたか」の問いは、はいと答えた患者が18.7%であった。「困ったことや不安に感じたことはありましたか」の問いは、はいと答えた患者が42.1%で、その具体的な内容は「病気にに関して気になる」「良くなることが目に見えないため不安になった」「この治療で本当に癌が良くなるのか、周りの人はどう思うか」「人に会えない寂しさ」「1人で3日間過ごすことに苦痛を感じた」「入院中は看護師に相談できるが、退院してからのことが不安だった」であった。

### 3. 看護師の関わりについて

項目別の集計結果は図3に示す通りである。

看護師との関わりの気付きは「体調以外でも気軽にナースコール出来たら良い」「副作用がほとんどなかったので看護師との接触は必要最小限だった。副作用が出た場合や入院期間が長くなれば別の印象を持つかもしれない」「優しく声をかけられて心が落ち着いた」「説明が親切で安心できた」という意見があった。

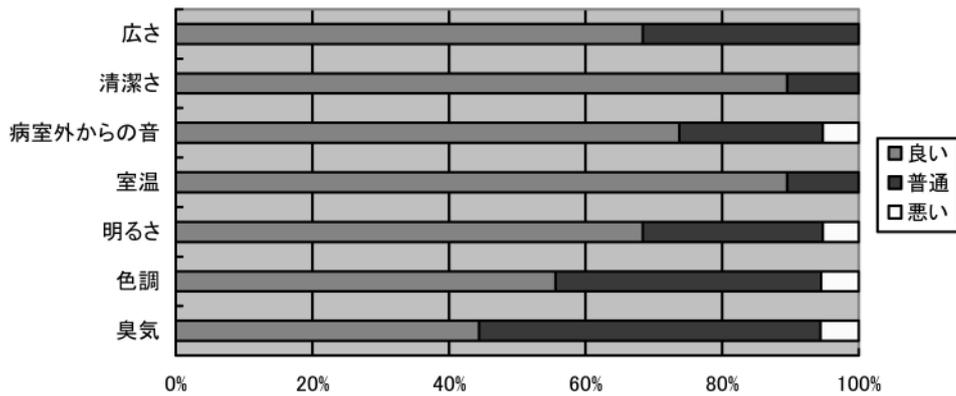


図1.病室環境

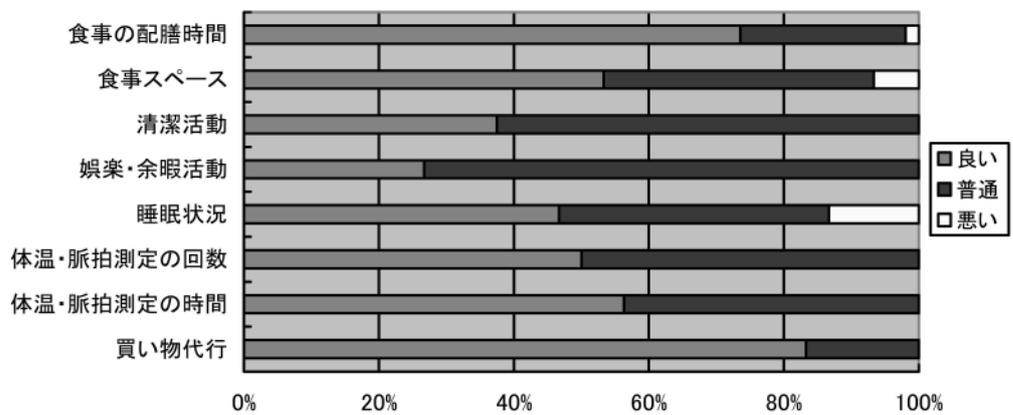


図2.入院生活

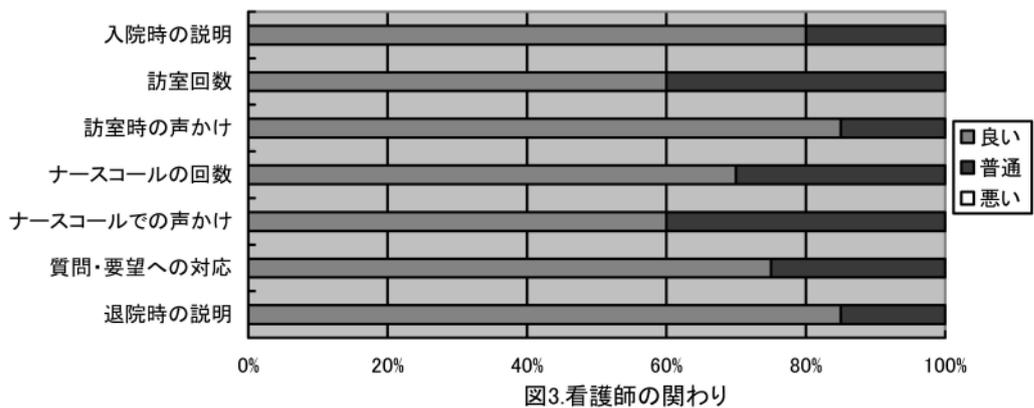


図3.看護師の関わり

## V. 考察

病室環境の広さについては悪いという回答はなく、「予想より広かった」という良い意見があった。先行研究では、RI 治療は環境面において隔離されていることの苦痛指数が高いことが明らかにされているが、「圧迫感、閉じこめられた感はなかった」という意見があり、患者は病室スペースに対して圧迫感などの苦痛を感じていないことが分かった。

RI 病室の壁と床は放射線汚染防止のために白いシートが敷かれており、色調は白一色である。それに対して「他の色もあった方が良い」「部屋全体が真っ白く早く出たいと思った」

という意見あり、病室内に絵画やカレンダーを設置するなど色合いを加える工夫が必要である。臭気に関しては、副作用で嘔気のある患者にとって苦痛であることが分かった。RI病室は窓を開けて換気ができないため、昨年より空気清浄機を設置した。また、食事スペースが「狭い、窮屈」と感じている患者や、場所がトイレの横であることを不快に感じている患者がいたため、蓋付きゴミ箱の設置や食事スペースの変更を行った。佐藤らは「RI治療において、環境を整えることが精神的苦痛の軽減に繋がる」<sup>2)</sup>と述べている。今後も病室環境の更なる改善を検討し、環境面の充実を図っていく必要がある。

入院中の患者は、治療効果や再発への不安、人に会えない孤独感を感じていた。しかし特殊な病床環境により、気分転換や気晴らしになることがほとんどないのが現状である。病室に備えて欲しいものでは音響用品が最も多く、病室外からの音が「少しは聞こえる方が寂しくなくて安心する」という意見からも、閉ざされた空間で音のない環境は、より一層孤独感が深められることが分かった。福澤らは「無音の環境は患者にとって違和感があり音楽の必要性が確認できた」<sup>3)</sup>と述べており、好きな音楽を聴くことで、孤独感の軽減や気分転換に繋がることが期待できる。病室に持ち込めたら良いものでは携帯電話が最も多く、同様の効果を期待していると考えられる。よって、音響用品の設置や病室への携帯電話の持ち込みを今後検討していく必要がある。

看護師の関わりについては、全ての項目で悪いという回答はなく、多くの患者は好印象を持っていた。先行研究において、RI治療を受ける患者の対処行動で「看護師との関わりで安心を得る」が挙げられているように、患者は看護師の声かけで安心感を持つことが分かった。入院・退院時の説明が良いと答えた患者は80%以上と多く、入院オリエンテーションで病室見学が定着したことやパンフレットの改正を行ったことが、患者の理解に役立っていると考えられた。看護師との関わりについては「体調以外でも気軽にナースコール出来たら良い」という意見があり、患者からも気兼ねなくナースコールできるような環境を作り、ナースコールを積極的に活用して、関わりの充実につなげていきたい。また、「優しく声をかけられて心が落ち着いた」「説明が親切で安心できた」という意見があり、私達の関わり次第で患者の苦痛が軽減できることを自覚した上で、患者の不安や孤独感を受け止め、思いを表出できるように支援していくことが重要である。

## VI. 結論

1. RI治療を受ける患者の隔離状況下における入院生活の実態やニーズを明らかにするために、アンケート調査を行った。
2. 病室環境について、病室に色合いを加える工夫や臭気対策が必要である。
3. 入院生活について、気分転換や気晴らしになるものがなく、音響用品の設置や携帯電話の持ち込みを検討する必要がある。
4. 看護師の関わりでは、多くの患者が好印象を持っていた。今後も患者の不安や孤独感を受け止め、思いを表出できるように支援していくことが重要である。

## 引用文献

- 1) 佐川雄太, 中村麗奈, 尾形千悦: 放射性ヨード内用療法を受ける患者の気分と身体症状について—治療未経験者と治療経験者の経時的変化—, 第42回日本看護学会論文集

(成人看護Ⅱ), 202-205, 2012

- 2) 佐藤仁美：131I 治療のため隔離された患者の嘔気に関する調査，看護の研究（26），社団法人全国自治体病院協議会総婦長部会，282-285，1994
- 3) 福澤知美，上村圭子，宮崎富士子：ヨード内服治療により放射線管理区域に隔離入院した患者の入院生活の受けとめ—治療後の患者への面接調査からの分析—，日本がん看護学会誌，25，179，2011

#### 参考文献

- ・伊藤悦子：RI 室入室患者の生活状況の実態—入院前オリエンテーションの試み—，新潟県立がんセンター新潟病院看護部看護研究，平成 17 年度，102-104，2006
- ・中村麗奈，尾形千悦：放射性ヨード内服療法を受ける患者の，不安や困難の傾向と対処行動に関する質的分析，第 42 回日本看護学会論文集（看護総合），204-207，2012